

「それでも神はいる」
ヨブ記 2章1節～10節

はじめに

今朝は「それでも神はいる」という題でお話します。

中心聖句「あなたは愚かな女の言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか」（10）。

I 神はいるか。

1 神はいないと言う場合。

神はいないという人がいます。いわゆる無神論者と言われる人です。その人たちは、次のような理由から、神はいないと主張しているようです。

(1) 世の中に不幸があるから、神はいるはずはない。

ここに出てくるヨブという人は、裕福で、家族にも恵まれていました。しかし、災害で家族を失い、自らも思い病気になるしました。すると、奥さんはこう言ったのです。「あなたは、これでもなお、自分の誠実さを堅く保とうとするのですか。神を呪って死になさい」（2:9）。

どうして、このようなことが起きるのか。神がいるとすれば、どうしてこのようなことが起きないようにしないのか。だから、神などいない、と人々は言います。

(2) この世は、神が造ったのではなく、自然に出来た。人間は、神が造ったのではなく、生物が進化してこのようになった。

この問題は、長くなるので、別の機会に扱いたいと思います。

(3) 宗教は嫌いだ。

この人たちは、神を信じるのは弱い人のすること。宗教は、人と争いを起こすので嫌いなど、感情的に宗教が嫌いな人です。この問題も別の機会に扱いましょう。

2 神はいるという場合。

(1) 神がいるから、人間は幸福になれた。

神を信じて幸福になった人はたくさんいる。神を信じた人によって、この世に祝福がもたらされた。科学、医学、教育、人権の進歩。

(2) 神がいなければ、このような完全で美しい自然が出来るとはならない。

科学や医学の発達で、自然や人間のすばらしさがますます明らかになってきました。

(3) 本当の問題は、人間は神を知ることが出来るのか、ということです。

人間は、神を知り得るという前提で、いるとかいないとかを議論しますが、問題は、神がいるとしても、それを知ることができるのかです。

例話：あるものがここに在ることを知るには、最低二つの条件が必要です。

一つは、光。もう一つは、それを知る能力。先ず光ですが、それが目に見えるものであっても、光がなければ、そこにあることを知ることは出来ません。目に見えないものはどうでしょう。電気、空気、人間の心など、たくさんあります。その場合は、そのものではなく、結果よって知ることが出来るのです。

電気ならば、明かりがつく。温かくなる。音や絵が出るなど。空気ならば、火がつく。苦しくなる。心ならば、その人のことばや行いによって。

人に会うこともそうですね。いくら逢いたいと思ってもその人が現れなければ逢えません。

もう一つの条件は、能力です。たとえば、いくらものがそこにあっても、目が見えなければ見ることは出来ません。

適用：これまでのことを、神がいるかどうかということに当てはめてみましょう。

まず光です。この場合、神は見えないので、結果が問題になります。神の存在を示すものがあるかどうか。

- ① 宇宙や自然や人間。
- ② 神のことばである聖書

次は、人間に能力があるかということです。ここが問題です。人間は、罪を犯したので、神を知ることが出来ないのです。人間の知性は、罪に犯され、神を知ることができないのです。

ですから、結論としては、いくら、神がいるとかいないとか議論しても、人間は今、神を知ることが出来ない状態なのです。では、どうすれば、神を知ることが出来るようになるのかを、問わなければなりません。

II 聖書の神。

世の中には不幸があるから、神はいるはずがないという人たちに答えて見ましょう。

1 全知全能の神。

聖書の神は、「全知全能の神」です。

(1) 神は、すべてを知っておられる。

例話：ヨブの例。ヨブは、潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていました。7人の息子と3人の娘に恵まれ、その地方一の富豪でした。このヨブに災いが襲い、牛、羊、らくだ、らくだが全滅し、息子と娘も全員死にました。さらにヨブ自身が足の裏から頭まで悪性の腫瘍に冒されて苦しみました。この時、ヨブの妻は、たまりかねて、ヨブに「神をのろって死になさい」と言ったのです。こんな痛みを与える神などいるはずがない、いたとしてものろって、死んだほうがましです、と言うのです。

ヨブの妻は、神がこんなことを許すはずがないと勝手に決めています。しかし、神がヨブにこのことが起こるのをお許しになったのです。

例話：イエス様の時代に、生まれながらの盲人に、弟子たちは、なぜかと質問しました。イエス様は、「神のわざがこの人に現れるため」とおっしゃいました。

神様は、すべてをご存じなのです。どうして、私にこのようなことが起きたのか。

例話：私は、家族の中でただ一人入院したことがありませんでした。教会も順調で、礼拝出席者も100人を越えるようになっていました。家庭も祝福されていました。そんなときに、癌になったのです。重光先生が「どうして中村先生のような人が癌になるのか。俺は悪いことをずいぶんやったから、自分になるならわかるが」と言って、慰めてくれました。

私も神様を信じていたので、神様を疑ったり、うらんだりすることはありませんでした。神様のなさることには、必ず意味があるからです。

(2) 神は何でもお出来になる。

しかし、何でもなさるわけではありません。神は、悪いことは決してなさらないのです。

例話：皆さんは、子どもが人を殺したいからナイフを買ってと言っても、決して買ってあげないでしょう。買うお金がないからではありません。買うことは出来ます。でも、しないのです。

2 神がなさることはすべて正しい。

このことは、神のなさることには、意味があるということです。どうして私にこんなことが起きるのか。神がいらっしゃるのになぜ、と思うことがあります。そのことが起きることを許されたのには、意味があるのです。神様は、決して悪いことは行わないのです。神がなさることは必ず正しく、意味があります。

多くの場合、人間の罪や過ちの結果、不幸なことが起こります。でも、それが起きることを神様は許されました。そこにも神様の意味があるのです。そう信じるのが正しいのです。

3 神は愛です。

神は、その本質が愛なのです。ですから、神の私たちになさることはすべて、神の愛から出ています。

例：イエス・キリストのご生涯に、神のこの「全知全能」「正しさ」「愛」がすべて現れています。

特にその十字架を見てください。神の御子が、罪人と同じように、十字架で処刑されたのです。神は、この事をご存じなかったのでしょうか。助けることが出来なかったのでしょうか。神の御子なのに、愛して助けることをしないのでしょうか。イエス様の十字架は、最悪の事態です。神の御子が、何も分かっていない人々の手で十字架に掛けられて殺されてしまうのです。しかし、それは、神のみこころでした。神様がそのように計画し、実行なさったのです。イエス様が苦しむこと、殺されることが神のみこころだったのです。

神様はイエス様を愛していました。しかし、このイエス様の十字架なしには私たち罪人は救われないのです。十字架に神の愛が現れたのです。それは、私たちに対する神の愛でした。

たくさんの仏像があります。でも、その一つとして、イエス様のように十字架に苦しむ姿はありません。プロテスタント教会は、十字架に磔になったキリストの像をつけることはしませんが、クリスチャンが心に描くイエス様は、十字架につけられ、苦しむイエス様です。イエス様は私たちのために苦しんでくださいました。

苦しむ人がいます。どうしてこのようなことが起きるのかという疑問をもった人がいます。

例： 星野富弘さんは、中学校の体育教師をしていたときに、頸骨を損傷し、半身不随になりました。その苦しみのなかで、クリスチャンになり、口に挟んだ筆で絵を描き、詩を読んでも多くの人に勇気と希望を与えて来ました。群馬県に出来た星野記念館は、2021年の時点で来会者が700万人を超えました。全国で展示会が開かれ、私たちが四国に居た時にも丸亀であり、たくさんの来会者がありました。

どうして、こんな身になってしまったのか。星野さんの場合、こうなったからこそ、多くの人を慰め、励ますことができたのです。

イエス様は、その苦しむ人とともにいてくださいます。イエス様以上の苦しみを受けた人はいないでしょう。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです」（ヘブル4:15）。

そして、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」とおっしゃっています（マタイ11:28）。

結論

目には見えませんが、神様はいらっしゃいます。自分あるいは自分たちに起きたことを理解出来ないかもしれませんが、神をすべてを知り、どんなことでも出来る神として、間違ったことはなさない神として、愛の神として信じましょう。

神様をそのような方として信じ、その方とお会いするときに、あなたも問題に解決の光が見えてくるでしょう。たとえ、この地上で解決が分からなくても、天国に行ったときに、必ず分かります。